平成30年度県外研修報告

諏訪市立諏訪西中学校　矢崎知広

研修のテーマ　一流の専門家の講義を通した自己研鑽
１　研修期日　平成30年7月29日（日）、30日（月）、31日（火）
２　研修場所　第60回指導と評価大学講座　日本教育会館（東京等千代田区）
３　研修目的　新学習指導要領の全面実施に備え、一流の大学教授等が一同に介して講義を行う場で、必要な教師力を理論的、実践的に研修し、自己研鑽とする。
４　研修報告
（１）概要
　年に1回日本教育会館（東京都）において、「指導と評価大学講座」が行われている。１日の講義は、１コマ75分×４コマの講義形式で、途中リレーションの実践も入る。主な講師は、新学習指導要領について奈須正裕先生、通常学級における特別支援教育について曽山和彦先生、道徳教育について諸富祥彦先生など、それぞれ各地の講演会に呼ばれていく講師陣である。（別紙参照）

（２）講義より
　①新学習指導要領で育成をめざす資質・能力と授業づくりより　　上智大学教授　奈須正裕先生
　奈須先生の新学習指導要領についてのお話しは何度も聞いてきたが、同じテーマであっても、毎回切り口（視点）が違うので、前回聞いた話との共通点から理解が深まっていく事を実感する。まさに多角的、多面的に物事を捉えることにより、理解が深まるということを実感する時間であった。既に周知の事ではあるが、各教科等の目標の書き方が、「見方・考え方」と「資質・能力の三つの柱」からなる４文構成で揃ったことについては、数学なら数学だけで子どもが育つのではなく、教育課程全体で育つからという考えに立てば非常に分かりやすいと感じた。学力論を３つの層で考え、a:教科固有の知識やスキル、b:教科ならではの見方や考え方、c:教科等を横断する汎用的なスキル（コンピテンシー）の３点が、育てたい資質・能力であると考えると大変分かりやすく、理解が深まった。

　②通常学級で行う特別支援教育　　名城大学教授　曽山和彦先生
　教室でできる特別支援教育の「王道」はハンカチ理論（ハンカチのほつれた糸を持ち上げても、糸が切れてハンカチは持ち上がらない。ハンカチ全体を持ち上げれば糸も上がる。）という話は、興味深くなるほどと感じた。糸を特別に配慮する子ども、ハンカチを学級と考えれば、すなわち学級経営（学級作り）に行き着くのだと感じた。自尊感情やソーシャルスキルが乏しい子どもたちが増えている中、「理にかなう」支援としてa:視覚情報の活用、b:一文節に一つの指示、c:予定の伝達、d:肯定的な表現が大事だという話だったが、養護学校の先生方がまさに日常で大事にしている内容であった。印象的な言葉は、授業中にうるさい子どもがいるとして、ルール作りの場面で、ついつい「黙れ、うるさい」と**「あなたは」**の表現を使ってしまう。しかし、相手に入りやすい表現としては、「**（わたしは）**困ってる、静かにしてほしい」があるという話は、ベテラン教師が経験上培ってきたノウハウであって、確かに我々教師の大切なスキルだと感じた。我々教師にとっての最強であり、最高、最幸の言葉は**「ありがとう」**であるという話も、その通りだと感じた。

　③道徳教育でどんな力を育てるか　　明治大学教授　諸富祥彦先生
　最も印象的だった内容で、この研修に参加して良かったと感じた言葉は、教師（大人）が真剣に道徳的価値で悩む場面（ガチな内容）を実際に扱わないといけない。深い学びは、自分たちが本気で話をして、何ができるのかを考える、まさに頭（知的レベル）での理解ではなく、内臓感覚レベルの学びから生まれる。という言葉である。そして、問いかけ方の工夫で、「考え、議論する道徳」はできると楽に考えられることも実感した。例えば、電車の中で自分の座ってる席の前にお年寄りが立っているとする。a:座っている自分、b:お年寄り、c:横にいる人、d:近くにいる人に分かれて全員が役割分担の中で、同じ経験を行う。これを大事にして欲しいとのことだった。つまり、今までの自分たちは、その時に「どう思ったか」など心情を理解しようとしたり、「どうすべきか」というあるべき姿を考えさせたりしたが、頭で理解しても、実際に動けない子ども（大人も）が多い。それはモラルスキルトレーニングが不足しているからである。という話の中で、頭で道徳的価値を理解させることを今後議論して教材のあり方を考えるのではなく、もっとガチな思考、行動にしないといけないのではないかと、新しい視点をもらうことができた。

〔日本全国からの参加者〕

（３）今後の課題
　１年に一度は、大学生並の７５分×４コマという研修で自分を追い込み、新たな視点を獲得する良さを感じている。中央の第一線で活躍する専門家に触れることっも大きい。この学びを職場に活かし、常に自分の学びを鍛えていきたいと考えている。